



令和6年1月9日

蒲刈中学校だより

発行：呉市立蒲刈中学校
文責：校長 柿林 浩彦

第36号

第3学期始業式 学校長式辞

令和6年1月9日

校長 柿林 浩彦

みなさん、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。

令和6年がスタートし、学校は第3学期になりました。卒業証書授与式は3月7日（木）に行いますので、3年生にとって中学校生活は実質残り2ヶ月です。本当に残り少なくなりましたので、今まで以上に充実した中学校生活を送ってください。

さて、2学期の終業式では、藤井 聡太 八冠の話から「目指すのは勝利や記録更新よりも 81 マスの盤上にあるはずの『真理』を探究する」を紹介し、「大切なのは『真理』や『本質』を探究すること、もっと言えば『自分自身』を突き詰めること」と話しました。

そして、高校受験を控える3年生には、面接において志望理由を問われたとき、受験校の魅力や自分の知り合いが卒業したとかだけでなく、「自分自身」について語ってほしいと伝えました。

つまり、物事の「真理」や「本質」について自分なりに熟考し、「自分自身」は一体何をしたいのか、「自分自身」はどうありたいのかを考えてほしいとも話しました。

私は冬休みに、「君たちは、どう生きるか」という本を読みました。本と言っても、読みやすいように漫画化されており、所々に文章があります。原作は、吉野 源三郎（よしの げ



んざぶろう)さんが87年前の1937年(昭和12年)に刊行され、7年前に漫画化されて再び話題になりました。

主人公は病気で父親を亡くしたコペル君、そして、コペル君の叔父さんが登場します。

地動説を発見したコペルニクスにちなんで叔父さんや友達からコペル君と呼ばれる主人公は、叔父さんと一緒に「人間としてあるべき姿」を求め続けます。叔父さんはコペル君の父親から「息子には立派な人間になってほしい」という遺言を言われ、日々「自分自身」と真剣に向き合うコペル君に、アドバイスしたり一緒に考えたりノートを交換したりします。そのようなつながりから、コペル君が自問自答しながら人間的に成長していきます。

この本には、次のような記述があります。

「人間は自分を中心にして、ものを見たり考えたりするという性質をもっています。この性質は大人になってくると少しずつ弱くなりますが、大人でもまだまだ根深く残っています。このような自分中心の考え方が抜けきっている人は、非常に^{まれ}稀であり、非常に偉い人です。多くの人が、自分勝手な考えにおちいって、ものの真相が分からなくなり、自分の都合の良いことだけを見てゆこうとするものです。」

しかし、コペル君は、叔父さんと、そして、「自分自身」と対話をしながら、「世の中を回している中心などはなくて、『誰かのために』という小さな意志がひとつひとつつながって私たちの生きる世界は動いている。」という考えに至っていきます。

もう87年も前の本ですが、あらゆる世代の人たちが、この本の中から生き方の指針となる言葉を物語の中から見つけています。

「人間としてあるべき姿」を求め続けるコペル君と叔父さんの姿から、「自分の生き方を決定できるのは、自分だけだ。」ということが良く分かります。

皆さんもコペル君のように、「自分自身」と真剣に対話しながら、「真理」や「本質」、そして、「自分自身」のことをこれからもずっと考えてほしいと切望しています。

